広島通信診療所の建築について

A STUDY ON THE ARCHITECTURAL DESIGN OF HIROSHIMA POST HOSPITAL

李 明*, 石丸紀興**
Li MING and Norioki ISHIMARU

This paper focuses on Mamoru Yamada's architectural design of Hiroshima Post Hospital. As the first series of his design for the hospital, it represented the latest hospital layout including a definite design on the zoning and a movable outline function. Especially when we refer to the layout of consultation rooms. With the internal medicine room as the center, the surgery, ophthalmology, and x-ray room were allocated according to the American 'History Corridor' design. With the sunroof, the technique of catching the sunlight had been used. In order to get enough sunlight for the corridor, in between the border of each room, parapet is used as the upper part of the roof as well as the well-ventilated window. This type of architectural design concept marks the beginning of the modern rationalistic architectural in the modern Japan. In addition, it has a profound impact on the latest rationalistic work such as the architectural design of Tokyo Post Hospital.

Keywords: Hiroshima Post Hospital, Mamoru YAMADA, Tokyo Post Hospital, Osaka Post Hospital, modern segregated architecture

広島通信診療所、山田守、東京通信病院、大阪通信病院、近代合理主義建築

1. はじめに

逋信省の建築家として逋信省在任中数多くの局舎建築を設計した山田守であるが、通常の局舎建築とは趣を異にする病院建築の設計はその数が少ない。これまで彼の設計と確認できるのは広島逋信診療所¹(昭和10年11月竣工)、東京逋信病院(昭和12年10月竣工)、大阪逋信病院(昭和13年10月竣工)の3件のみである(以下これらの3病院を逋信病院と称する)。中でも東京逋信病院は日本近代における合理主義建築²の代表作として特筆されている³だけでなく、山田守の戦後における数多くの病院建築⁴に手掛ける契機になったものとしても高く評価され、大阪逋信病院はその「写し設計」として評価されている⁵。それに対し、東京逋信病院より2年前に建てられた広島逋信診療所は彼の最初の病院建築と言われながらも⁶、これまではあまり注目されていなかった建築であり、ほとんど研究⁷されていない。

広島逋信診療所は山田守の最初の病院建築として、彼の諸活動と病院建築との関わりを考える上で重要な意味を持つ建築であるだけでなく、山田守の1930年代初期の作品として彼の初期の合理主義建築を語る上でも興味深い建物と思われる。現在では、被爆後玄関棟が取り壊され、元の外来診療棟のみが残っているが、新築当時の姿はほぼ保存されており、周囲の建物と共に良好な都市環境を作り出

している。しかし現地では市街地再開発にあたってそれらに対する正確な情報を求めており、本稿はこのような動きに対応するものとしても重要である。

本稿は、広島逋信診療所に関する諸文献と調査⁸を通じて、その沿革、設計の特徴について検討・評価し、また東京・大阪逋信病院との比較考察を通じて、山田守の逋信病院設計活動における広島逋信診療所の位置付けを明らかにすることにより、山田守の近代合理主義代表作である東京逋信病院設計活動との関連について考察しようとするものである。

山田守については、その作品集⁹や、向井寛による身近にあって始めて可能な伝記的労作など¹⁰があり、逋信病院建築についても、特に東京逋信病院建築については、既に多く論じられており一定の史的評価も定まっている¹¹。本稿はこれらにも多くを負っている。

2. 広島逋信診療所の沿革及び建築概要

2-1. 沿革概要¹²

広島逋信診療所は大正11年に初めて共済組合による専属の医療機関として設立され、大正11年4月、木造にて広島市西地方町134番地に新築されたがその設計者は不明である。その後、逋信診療所設置の規定化によって、逋信局内職員及びその家族の傷疾、疾病の

* 広島大学大学院工学研究科 博士課程後期・工修

** 広島大学工学部建築計画学 教授・工博

Graduate Student, Graduate School of Engineering, Hiroshima University, M. Eng.
 Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Hiroshima University, Dr. Eng.

診療治療をする目的をもって、広島通信診療所は昭和 10 年 11 月 27 日、RC 造にて広島市中区基町 6 番地（現在の中区東白島町 19 番 16 号）に新築された。その設計者が山田守であり、本稿の考察対象になる広島通信診療所（以下「診療所」と略す場合がある）である。診療所は昭和 9 年 11 月 15 日に起工式、翌年の昭和 10 年 11 月 27 日に工事完成、同年 12 月 20 日落成式、同年 12 月 22 日開業式が挙行された。総経費は 131,876 円であった。運営に当たっては、通信部内職員共済組合診療所規定として、所長、医員、書記、薬剤長、技術員、看護婦などの職員を置いた。広島通信局長は前項職員のほか、必要と認める診療所に看護婦見習いを置くことができ、職員のうちより各一名を限り医長、事務長、薬剤長、看護婦長を命じることができた。昭和 12 年 2 月 1 日、広島通信診療所規定廃止、共済組合診療所全部を国営に移管した。ただし、薬局は共済組合に残した。昭和 15 年 7 月 12 日、診療所の各科には科長が配置され、内科、外科、眼科、耳鼻咽喉科、小児科、歯科の 6 診療科となり、それぞれに科長を配置した。昭和 17 年 2 月 10 日診療所を広島通信局総務部の一院として、広島通信局総務部通信病院と改称。昭和 17 年 11 月 1 日広島通信局広島通信病院となり、産婦人科を設置した。当時の在籍職員は、医師 10 人、看護婦 20 人、その他 17 人、合計 47 人であった。

昭和 20 年 8 月 6 日被爆。被爆したため鉄筋コンクリート造の本体及びレントゲン装置を残し、窓、扉その他内部諸設備品の殆どが破壊焼失した。特に二階は産婦人科、歯科診療室を除く入院病室、食堂、浴室、物置、宿直室、応接室等火災のため壊滅状態になった。昭和 22 年 3 月より本格的に復旧工事に着手、遂時年次を追って整備され、昭和 55 年 12 月総合病院となり現在に至る。

図 1 北側からの外観。左側が病棟、右側が玄関を置いた事務棟（1935 年）

図 2 病棟南側の外観。1 階が診察室、2 階が病室、3 階は日光室（1935 年）

2-2. 建築概要

広島通信診療所の建築に関わる原資料は原爆によって全て失われているので、設計図面や当時の施工技术、病院としての設備的なものを検証することはできない。被爆後の木造建築で復興された建築の資料は中国郵政局建築部に保存されている。当時の貴重な写真集も少量ではあるが同所に現存されている。その他、山田守の作品集に紹介されている写真と図面がある¹³。以下、これらの資料と現状

とを比較しながら、建物について検討する。

新築当時の診療所は鉄筋コンクリート造、地下 1 階・地上 2 階・一部 3 階建て、敷地面積は 746.5 坪、建築面積は 487 坪、病室は 12 室、ベット数 30 であり、病院としては比較的小規模なものであった¹⁴。当時の設計図面は残っていないが、「合衆国戦略爆撃調査団の報告」¹⁵によると次のような特徴が認められる。①構造：鉄筋コンクリート造、②屋根：鉄筋コンクリート梁とスラブ、③間仕切り：ラスと漆喰（木のラス）、④壁：8.5 インチ鉄筋コンクリート、大開口窓、⑤床：鉄筋コンクリート梁とスラブ、⑥窓及びドア枠：鋼鉄、⑦天井はコンクリートの上に漆喰塗、などである。

ブロック・プランは玄関を中心にして南側が診療と病棟、北側が事務棟になり、1 階は診療部門と事務部門の西側が廊下で結ばれ中庭式のブロックになっていた。なお、玄関を東面にさせ、その前面には三角形の空地を設けて患者を玄関に導いている。診療棟は 1 階が診察室、2 階が病室、一部 3 階は日光浴室となっていた。そして、診療棟は 1 階が外科、内科、2 階は産婦人科、眼科、小児科となっている。立面は桁行きスパンいっばいに窓をあけたデザインであり、外壁の角部、庇の角、屋上手すりの角等は曲面になっている。なお、サッシが外壁に近くつけられているなど、軽快で明るく威圧感を与えない親しみ易い表現になっている。

被爆によって大きな被害を受けたが、その後の復旧整備によって診療所はその規模を拡大し、現在は、玄関棟が取り壊されていて、元の外来診療棟が、新築当時の姿を継承する形で保存されている状態である。

3. 山田守における広島通信診療所の設計経緯

3-1. 山田守と通信病院建築

通信省では部内固有の総合病院が必要であるとの観点より、大正末期から昭和初期にかけて前後 10 回、大蔵省に建設費の予算要求を行ったがすべて認められなかった。昭和 8 年、当時の通信大臣南弘は専属病院の必要を認め、民間の有力者や新聞通信社に呼びかけた。そして民間から募金によって病院を建設し、これを国に寄付しようとの議がまとまった。この案は財政界の賛同を得て、昭和 9 年の初めに、東京及び大阪に通信病院建設後援会が結成された¹⁶。それに伴って各地方の通信診療所も、その後の通信局内職員及びその家族の傷疾、疾病の診療治療をする目的を持って診療所を拡大して新築移転し始め、通信病院の建築は通信省経理局管轄課¹⁷が担当した。

山田守は大正 9 年に東京帝国大学工学部建築学科を卒業し、同年通信省経理局管轄課に奉職し、昭和 15 年には管轄課長となり、昭和 20 年の退官まで数多くの局舎建築を設計した。しかし通常の局舎建築とは趣を異にする病院建築の設計はその数が少なく、これまで山田の設計と確認できるのは、広島通信診療所（昭和 10 年 11 月 27 日竣工）、東京通信病院（昭和 12 年 10 月竣工）、大阪通信病院（昭和 13 年 10 月 3 日竣工）の 3 件のみである。これらはいずれも 1930 年代の作品として、山田の合理主義建築活動を語る上で欠くことのできない建築である。1930 年代の山田守は欧米への出張¹⁸、通信省の合理化経済化を求める建築設計方針¹⁹を契機として近代合理主義建築を目指して活発に建築活動を展開した²⁰。山田守は後になって「外遊中ヨーロッパでも、アメリカでも、お医者さんの友達が多かったものですから、ベルリンとかフランクフルト・アム・マインの新し

い病院とか、ニューヨークのメディカルセンターとかいろいろ見てきました。そういったことで多少病院建築にも興味を持っていたのですが、帰ってしばらくすると通信病院を造ることになりました。」²¹と述べている。浜口隆一は「出張を通して建築の科学性・経済性に対して、鋭く意識させられ、帰朝した山田守が自分の仕事として取り組んだのが、通信病院である」²²と、山田守の出張と通信病院建築の関わりについて指摘している。なお、村松貞次郎・堀勇良は1930年代の山田守について「合理主義を推進した戦前通信省の旗頭」と評価し²³、薬師寺厚は「…この時期は、帰朝後、終戦を期として通信省を退官されるまでの間で、東京通信病院をピークとして、山田さんの手になる通信建築秀作が続々誕生した時代である。」²⁴と述べているように、1930年代は山田守にとって合理主義建築の活動期であり、東京通信病院はその時期の代表作として高く評価されることとなった。

表1 広島通信診療所と東京・大阪通信病院の建設関連比較表

名称 内容	広島通信病院	東京通信病院	大阪通信病院
設計者	山田守	山田守	山田守
設計時期	不詳	昭和9年6月～昭和10年12月に完了	不詳
着工時期	昭和9年11月15日	昭和11年1月10日	昭和12年5月8日
竣工時期	昭和10年11月27日	昭和12年6月6日	昭和13年10月3日
所在地	広島市基町6番地 (現在広島市中区東白島町19-16)	東京市麹町区富士見町3丁目元陸軍軍医学校跡	大阪市
構造	鉄筋コンクリート造	鉄筋コンクリート造	鉄筋コンクリート造
規模	2階建・一部3階・地下1階	本館一棟地階附5階建・病棟2棟地階附4階建	地下附4階・一部5階建
敷地面積	746.5坪	4,461.00坪	不詳
延面積	487.00坪	4,304.83坪	2500坪
病室	12室	大病室7小病室61室	不詳
病床	30床	261床(計画400床)	200(計画250床)
分科数	3科	10科	不詳
工事費	131,876円	1,053,234円	665,000円
製図	不詳	片山隆三、俣川成美、羽石渡、鹿田正男、守武充	羽石渡、都木孝禧
監督	星野栄一、竹越新一、杉岡	山県章要、片山隆三、川守田清次郎、守武充、鹿田正男、小谷一男、俣川成美、藤川成一	土屋百三、川守田清次郎、北村金弥、都木孝禧
施行業者	坂本組	(株)大倉土木(現在の大成建設)等	松村組

注：表1は基本資料として中国郵政局長秘書課広報課所蔵の広島通信診療所の沿革に関連資料。「通信病院の設立」(郵政省、『郵政百年史』1983年9月16日、第2章、第7節の二、通信建築の展開)。「東京通信病院小史」(郵政大臣官房建築部、『建築記録・東京通信病院』昭和53年所収)。「東京通信病院の設計成る」(『通信協会雑誌』昭和10年7月号に所収)。山田守建築作品集刊行会、『山田守建築作品集』東海大学出版会、昭和42年。等によって補完した。

3-2. 山田守にとって最初の病院建築

山田守設計の3通信病院はいずれも1930年代の作品であり、3病院の着工時期の順序は広島通信診療所—東京通信病院—大阪通信病院になっているが、その設計時期については東京通信病院の設計時期以外は不明である。本節ではその設計時期の順序について検討する作業を通じて、広島通信診療所が山田守の最初の通信病院建築であることについて若干の確認と補足を行いたい。

まず、3病院の建設関連情報をまとめると表1のようになる。東京通信病院と大阪通信病院を比べてみると、大阪通信病院の着工は東京通信病院設計より1年4ヶ月遅れていることが確認できる。その設計時期は不明であるが、東京通信病院の設計が先行したことを証明する有力な根拠として、「大阪通信病院は東京通信病院のコピーのようなもので、自然熟意も足りなかったように思います。」²⁵との設計者本人である山田守の発言がある。ここで東京通信病院は大阪通信病院より先行の設計であったことは確認できるだろう。なお、

表1によると、広島通信診療所が東京通信病院より2年前に竣工したことは確認できるが、設計時期については東京通信病院の昭和9年6月着手、昭和10年12月完成に対して、広島通信診療所の設計時期は不明となっている。これまでに通信病院の設計時期の関連については薬師寺厚などによる一連の聞き取りの調査記事がある。先ず、『東京通信病院三十年史』²⁶には、東京通信病院を設計するに当たって山田守には当局が買い漁った高さ3～4尺に及ぶ病院建築関係の洋書が渡され、設計ができあがってから当局との間で種々の悶着があったという話が幾箇所かに書き記されている。その中には「習作としての広島通信診療所(昭和10年)がある、…」²⁷という話しも記載されているが、根拠は不明であった。次に、薬師寺厚と片山隆三(元通信経理局営繕課技師・東京通信病院設計に参加)の座談会での記録には「薬師寺：設計の段階までの話しだったら、片山さんが一番よく分かっておられる。片山：ところが、当時はべいべいだったから、そんな曇りの話しは分からない。具体的には、山田さんがいよいよ病院を作るんだそうだ、ということて…、もちろんあの時は、広島は病院、設計してありましたね。」²⁸と記載されている。この対話によると広島通信診療所の設計は確かに東京通信病院設計より先行した設計だったことが大体判明できる。そして、設計者山田守本人と薬師寺厚の対談の記録には「…薬師寺：荻窪から次の大作の通信病院に至る間におやりになったものでは、私が若い時に感激したものに広島の通信病院とか、神戸中央通信局の養成課…。山田：それから神戸の中央電話局もやりましたね。薬師寺：広島、熊本の貯金支局もその当時で…。山田：あれはちょっと後になるかも知れませんが…。」と記録されている²⁹。ここで山田守は広島通信診療所の設計を最初の病院建築として認めていたこと、なお広島貯金支局らの設計についてもよく覚えていることなど、この話しの確度が高いと考えられる。

東京通信病院建設経緯に関しては、昭和8年4月通信病院後援会設立準備会発足、昭和9年2月東京通信病院後援会発足となり、それは広島通信診療所の竣工よりほぼ2年前のことであったが、東京通信病院の設計完成時期(昭和10年12月)と広島通信診療所の着工時期(昭和9年11月15日)を比べてみると広島通信診療所の着工が1年2ヶ月程先行しており、建物の規模差は施工期に及び、竣工時期は1年半程の差となっている。一方、東京通信病院の設計着手は昭和9年6月で、広島通信診療所の着工よりほぼ半年程度早いものの、広島通信診療所の設計がこの時期に同時に進行したとは到底考えられず、既に終了していたと考えるのが妥当である。事実「東京通信病院小史」³⁰によると昭和9年6月、東京通信後援会により設計などの要請があつてしばらくしてから経理局営繕課が設計を担当することになったわけであり、約8ヶ月の設計準備期間をおいて、昭和10年3月に敷地が購入され、9ヶ月後の同年12月に実施設計が完了していると記載されている。すなわち、東京通信病院の実施設計は敷地が購入された昭和10年3月着手であり、これは広島通信診療所の施工着手(昭和9年11月15日着工)より4ヶ月遅れていることが明らかになった。ここで東京通信病院の設計は広島通信診療所の設計よりはるかに後のことと確認できるだろう。

以上により、山田守が関係した通信病院建築の設計順序をまとめると、広島通信診療所—東京通信病院—大阪通信病院になる。このように広島通信診療所は、のちに東京通信病院を初め数々の大病院

を手掛けることになる山田が、この分野に初めて手を染めたものとして、山田守の通信病院建築設計活動を考える上で興味深い建物であると、考えられる。

図3 広島通信診療所の平面配置図

図4 広島診療所の病棟の西南外観

図5 一階平面図

図6 二階平面図

1 玄関	14. 採光室	27. 化粧室手前室	40. 石灰投入口
2. 候客室	15. 採光室	28. 化粧室手前室	
3. 診察室	16. 採光室	29. 化粧室手前室	
4. 日光浴室	17. 採光室	30. 化粧室手前室	
5. 廊下	18. 採光室	31. 化粧室手前室	
6. 中庭	19. 採光室	32. 化粧室手前室	
7. 洗面室	20. 採光室	33. 化粧室手前室	
8. 洗面室	21. 採光室	34. 化粧室手前室	
9. 洗面室	22. 採光室	35. 化粧室手前室	
10. 洗面室	23. 採光室	36. 化粧室手前室	
11. 洗面室	24. 採光室	37. 化粧室手前室	
12. 洗面室	25. 採光室	38. 化粧室手前室	
13. 洗面室	26. 採光室	39. 化粧室手前室	

1. 洗面室	14. 採光室
2. 洗面室	15. 採光室
3. 洗面室	16. 採光室
4. 洗面室	17. 採光室
5. 洗面室	18. 採光室
6. 洗面室	19. 採光室
7. 洗面室	20. 採光室
8. 洗面室	21. 採光室
9. 洗面室	22. 採光室
10. 洗面室	23. 採光室
11. 洗面室	24. 採光室
12. 洗面室	25. 採光室
13. 洗面室	26. 採光室

図7 広島通信診療所の東立面図(正立面)

図8 2階階段室(西側)

図9 病棟の2階廊下

4. 広島通信診療所の建築特徴

1) 平面配置と計画: 広島通信診療所の平面配置と計画を見ると、敷地は東・南・北が道路に囲まれ、東北側はほぼ三角形の敷地になっている。建物は東北側の三角形の敷地に配置されている。プロッ

ク・プランは玄関を中心にして南側が診療と病棟、北側が事務棟になり、1階は診療部門と事務部門の西側が廊下で結ばれ中庭式のブロックになって機能を明確に区分し、玄関を東面にさせ、その前面には三角形の空地を設けて患者を玄関に導いている。当時の病院建築の敷地と建物との関係についての規則³¹⁾の必然的結果とも考えられるが、病院建築は外界との交渉が複雑であり、外来者、その他出入りするものの種類が多いのに対しての、道路、広場、病院という過渡空間の役割を考慮した設計者の設計手法でもあったと思われる³²⁾。なお敷地の南側には広い空地を残し、将来の病院規模の拡張を配慮した計画になっている³³⁾(図3)。

病棟は1階が診察室、2階が病室、屋上には日光浴室が設けられている(図5、6)。一階の診察室は南に向けて、内科を中心に外科、眼科、レントゲン室などを配置し、その各室に沿って一方の共同の待合室に接して所謂ヒストリーコリダを配するアメリカ式のプランになっている³⁴⁾。病棟の1階手前にある出入口は外科専用のもので、患者搬送の時にはわざわざ玄関から迂回せずに、直接この入口を使用して手術室に運ぶことになっている。なお、廊下あたりの空間を利用して緊急用の単独の待合室が設置されている。妻側の細長い窓は階段室であり、採光が充分にとれるようになっている。階段室はオープン型で廊下に接している(図8)。病室は南に面しており、窓開口部は大きく採光は充分にとれている。夏日の際の日除けとして病室の窓の上部にはオーニング(awning)が取り付けられている(図2)。また、病室の通風を充分ならしめ、他方、廊下の採光に資するため、廊下各室間の境には上部に欄間、下部には通風ガラス付採光窓を設けている(図9)。特に屋上の日光浴室はディ・ルームの特化した部屋として造られ、日光浴室とディ・ルームを兼ねた部屋になっている。1920~30年代の比較的規模の大きな病院建築では廊下の突き当たりや建物の角部分に日光浴室(保養室、休息室という名称の場合もある)を設けた事例がある³⁵⁾。しかし、広島通信診療所のように通信局内職員及びその家族の傷病、疾病の診療治療を目的として建設された小規模の病院建築に日光浴室を配置し、さらに日当たりがよい屋上の空間を利用して、日光浴と休憩空間の十分な採光を考慮した設計手法は、当時としては極めて珍しかったと言っても良いだろう³⁶⁾。また冷暖房装置を取り入れるなど当時としては画期的なものであった。

2) 造形的特徴: 造形的に見ると、ファサードは白い壁、大きな開口、方立の細かいバランス上げ下げ窓等から構成され、屋上にはカンティレバーのサンルームが設けられている。スパンは3,600×8,000を基調として構成され、窓はスパンを3等分し、その大きさは約W=2,600×3,500となっている。なお、サッシ(サッシは鋼製で部材寸法は細かい)が外壁に近くつけられ、診療所は軽快で明るく威圧感を与えない親しみ易い表現になっている。それらは当時の傾向とも関わるが山田守設計の建築作品の特徴がよく見られる。アメリカ合衆国戦略爆撃調査団の報告書の中に『非常に大きい窓』という表現を使っていることが、何か一般の建築の窓よりも非常に大きかった感覚でとらえられていたのではなかろうか。小原誠は「桁行スパン一杯の窓をあけたデザイン」³⁷⁾として、局舎から広島通信診療所、東京通信病院への一連のデザインの傾向をあげている。この診療所より少し前に建築された、広島通信局³⁸⁾は影の深いどちらかといえば、重厚な感じの規模の大きい建築であるが、通信診療

所は非常に軽快で明るい感じのするスマートな建物となっている。そして、診療棟の窓は1・2階共、最下段は突き出し窓、上段は上げ下げバランス窓になり、廊下の窓は二重梁によって上下不同な意匠を配慮されている(図9)。外壁の角部、庇の角、屋上手りの角などは曲面になっている。ここで、山田守の1920年代においてよく使っていた表現主義の色彩が濃い大きな曲面、アーチ模様の庇の工夫等は姿を隠している。バランスやプロポーションよりも輪郭の単純で明快な構成が追及され、平坦な壁と大きな開口部が主要なモチーフとなり、独立した装飾は一切除かれ、こうしてこの建物は明るく軽く陰翳を残さぬ空間とマッサから構成されている(図1、2、4、7を参照)。そして、床仕上げはリノリウム張りであり、天井釣り照明器具は球形のグローブになっている。全館総ての器具は球形で統一されていた。柱の角、梁の角、出入り口の周囲は小さな曲面になっているなど、山田守がよく使う設計手法になっている。

以上のように、この建物は、山田守の初の病院建築としていくつかの試みが見られ、新しい病院計画のあり方を示し、明確なゾーニングと動線計画による機能的な平面計画となっている。なお、その建築傾向には、単に合理性や経済性ということでは説明しきれない意図が認められ、造形的な単純さもしくは軽快さと明るさが、この建物には強く求められている³⁹。

図10 東京通信病院の平面配置図

図11 大阪通信病院の平面配置図

図12 東京通信病院病棟の南東外観(昭和12年)

図13 大阪通信病院病棟の東南外観

図14 避難階段丸い踊り場

5. 東京・大阪通信病院建築との設計理念・手法の関連

全般的にみると、規模の差はあるが、何れも直線・直角・平面とあいまって白一色を基調とし色彩をも単純化したスマートな形態が眼に届く。3病院の規模差が大きいため病院建築としての機能につ

いて全面的に比較を行うのは難しい。ここでは、主に3病院の設計理念、形態の特徴を中心として若干の確認と比較考察を試みる⁴⁰。

1) 工事費単位: 表1を見ると、規模の差は大きい、何れも鉄筋コンクリート造建て、工事費は坪200円くらいで比較的安値であったことが認められる。当時、他の建築や電話局等が坪当たり400円位であったといわれる。これらは山田守が建築の合理性・経済性に対して、鋭く意識されていたことを裏付ける。ここで東京通信病院の合理化・経済化という合理主義的な特徴は広島通信診療所において既に実現されていたと言ってもよいだろう。

2) 配置計画: 敷地の形態を見ると広島通信診療所と東京通信病院はその規模と方位の差はあるがほぼ同じ形態になっている(図3、図10)。東京通信病院においては南北軸の中央廊下をもって東西軸の各棟を直交連結するものであって、東側に南面して並列する病棟(当初は2病棟、後になって4病棟になる)と西側に南面する診療管理棟は整然とし、日照通風に最適の方位と間隔をもって配列されている。玄関は北側に面し、その前面には広島通信診療所と同じ手法でほぼ三角形のような空地を設けて道路、広場、建物玄関という明快な過渡空間を与えられている⁴¹。そして病棟の1階手前にある出入り口は外科専用のもので、患者搬送の時にはわざわざ玄関から迂回せずに、直接この入口を使用するようになっている共通点が認められる。大阪通信病院の場合は図11のように、敷地はほぼ長方形のようなものであり、建物は診療棟と病棟は長方形の一本のブロックを東側の電車道路に垂直して配置され、南側のボイラー、厨房棟は渡廊下で結ばれている。玄関を北側に面し(敷地の主要入口は東側の電車道路に面している)、その前面には広い空地を残して将来の病院規模の拡張を配慮した計画になっている⁴²。3病院のブロックプランの構成は何れもデッサウのパウハウス校舎などと同じ手法のもので、機能が同じ室を重ね合わせて一つのブロック単位とし、こうしてできる諸ブロック単位を有機的に連続していく。合理主義的なプランニングの正統的な系譜に属するものと言えよう。しかし大きな差異点として広島通信診療所では診療棟と炊事室などの補足空間を連結する渡廊下を利用して中庭を設ける手法になっているが、東京通信病院と大阪通信病院では、空気の停滞し、通風が悪く採光上の欠点が多いなどの理由で中庭式ブロックを廃止している。しかしその廊下を設ける手法は東京通信病院では病棟と病棟を結ぶ役割を果たし、大阪通信病院では病棟・診療棟とボイラー、厨房棟を結ぶ役割を果たしていた。

3) 病院建築としての科学的対応: 3病院は何れも病院建築の科学的な機能の解決が認められる。日光浴室について、3病院は何れも屋上の空間を利用して単独に設けられている。広島通信診療所では日光浴室とディ・ルームを兼ねた部屋として設けられているが、その詳細については不詳である。東京・大阪通信病院では患者の日光浴の為に屋上日光浴室に紫外線透過ガラスを使用し、なお室外にガラスクリーンを設け強風、裸身を他よりうかがわれる事を避けることになっている。このような設計手法は当時の日本の病院設計においては極めて珍しかった。ここで、日当たりがよい屋上の空間を利用して日光浴室を設ける設計手法は、広島通信診療所に初めて採用され、後の東京・大阪通信病院という時間の流れによってより洗練され、具体化されたことを指摘しておきたい。病棟について、広島通信診療所は南西に向けて設けているが、東京通信病院の病棟は

できるだけ朝日（朝日の中には紫外線もあるからということを考えていたと言われている）を満足させるために病室を東南に向けている。また、東京・大阪通信病院の大病室南側には回復期の患者の日光浴に備えるため、3段上げ下げ窓を採用し、患者の寝台を直接露台に引き出し得るように計画した。なお、露台は夏日の際の日除けとしても有用なものであった（図12、図13）。広島通信診療所の場合は、夏日の際の日除けとして病室の窓の上部にオーニングを取り付けるようになっていたのである（図2）。そして、病棟には非常の際、患者を担架に乗せ、迅速に移動できるよう、避難傾斜路を設けるなどの特徴が見られる。そして、手術室の窓には防虫用網戸及び鍍形日除をすべて設置しているが、広島通信診療所については不詳である。これらの特徴は東京、大阪通信病院の方がより科学的に計画されたことを表している。なお、東京通信病院には病室の通風を十分にし、他方、廊下の採光に資するため、廊下各室間の境には上部に欄間、下部には通風ガラス付採光窓を設けるなどの特徴が見られるが、このような設計手法は既に広島通信診療所において実現されていたのである。

4) 造形的特徴：建築造形的に見るといずれも直線的あるいは直平面が主要なエレメントになっている。しかし、ここで1920年代の曲線の多用は影を潜めるが、建物や庇の角に小さな曲線が使われて、病院の外観を感じる柔らかさを添えており、バウハウスなどの直線的デザイン系譜のものとはやや異なって、山田守の設計の特徴となっている。こうした取り扱いが東京通信病院と大阪通信病院の方が突き出した玄関の白い丸柱、避難階段の丸い踊り場（図14）など曲面部分がより眼に付くことが認められる。なお、白いタイルを内外とも同じように使うのは病院建築としての特徴がよく認められる。3つの病院のファサードは何れも白い壁、大きな開口、方立の細かいバランス上げ下げ窓等から構成され、屋上にはカンティレバーのサンルームが設けられているなど、軽快で明るく威圧感を与えない親しみ易い表現になっていることが認められる⁴³。

6. まとめにかえて—山田守の通信病院設計における広島通信診療所の位置付け

以上により、広島通信診療所の建築を取り上げ、その沿革、設計経緯、設計特徴について検討・評価し、また東京・大阪通信病院との設計理念・手法の関連について考察を試みた。

その結果、昭和10年11月に建てられた広島通信診療所は、山田守の最初の病院建築設計として、その規模が小さいが、建物の外観、内部、その他における虚飾を廃し、単純明朗な形態となり、工費の節減を計り、そして近代病院建築の複雑な機能に対する科学的要求を充足することに専心努力するなど、東京通信病院の合理性を表す多くの設計理念と内容は広島通信診療所において既に初歩的に実現されていたことが明らかになった。そして、山田守自身も後になって述べている⁴⁴ように東京通信病院と大阪通信病院は設計理念と形態はほぼ同じカテゴリーのものであって、両者の差は規模の大小および敷地形状の制約によるのみであった。これらは、広島通信診療所—東京通信病院—大阪通信病院という時間的流れの中で、山田守の合理主義病院建築の設計手法・内容は広島通信診療所によって初めて試行的に実現され、東京通信病院によってより洗練され、具体化されたことを表明し、大阪通信病院はこのような洗練された設

計手法の「写し設計」に当たることを表明する。また、「通信史話」によると、東京通信病院の設計は最初通信局外部の建築家に委託する予定だったが経理局営繕課内部で“通信省にも建築技師がいる。それを自分たちに病院建築の経験がないからといって…”⁴⁵という強い反発の声が上がった、という事情があった。そして薬師寺厚と片山隆三の座談会での記録には「薬師寺：広島は郵政局の隣の病院（当時、通信診療所と呼ばれたもの）は既に完成していました。片山：黒い煙突のね。だから山田さんとしては自信を持っているわけです。そこへ、上から、お前達は病院に関しては、ことに大きな病院に関しては素人だと、で、三楽病院を設計された福田さんを連れてきたものだから、山田さんが猛然と闘魂を燃やしたわけですね。…」⁴⁶と記載されている。それらは広島通信診療所の設計は、山田守が東京通信病院を設計する契機となり、広島通信診療所の設計を通じて、東京通信病院の設計に自信があったということを裏付ける。ここで東京通信病院という山田守の代表作の裏には彼の初めの病院建築設計である広島通信診療所があり、その果たした役割は大きかったと言ってもよいであろう。村松貞次郎・堀勇良は「昭和10年の広島通信診療所を習作と考えれば、…」⁴⁷として広島通信診療所を評価し、また、村松貞次郎は「…実際には小さなものではあったが『広島通信診療所』（昭和9.11.15～10.11.27）という実績が山田にはある。そのあたり、あるいは山田一流の“呼吸”があったかもしれない。」⁴⁸と述べているように、小規模ではあったが広島通信診療所の設計理念・内容は、後の東京・大阪通信病院建築設計に大きな影響を及ぼしたと言ってもよいだろう。

つまり、広島通信診療所は、①山田守にとっては最初の病院建築設計であること、②その規模が小さいが、単純明朗な形態となり、新しい病院計画のあり方を示し、明確なゾーニングと動線計画による機能的な平面計画になっている、などの特徴が認められる。特に、診察室の配置にあたり、内科を中心に外科、眼科、レントゲン室などを配置し、共同の待合室を設けるなどアメリカ式の合理的病院建築のあり方の具現を試みた平面計画、日当たりがよい屋上の空間を利用して日光浴と休憩空間の十分な採光を考慮した設計手法、廊下の採光に資するため、廊下各室間の境には上部に欄間、下部には通風ガラス付採光窓を設ける設計手法、桁行スパン一杯の窓をあけたデザインなどは当時の日本では極めて先行的な設計手法であったこと、③なお、このような設計理念と手法はのちの東京・大阪通信病院設計にも大きな役割を果たしたこと、などを評価したい。

謝辞：

本論文をまとめるにあたり、中国郵政局前施設建築課の土江裕氏と畑本安幸氏から多くの情報を得た。そして「戦前・戦後の広島における建築家の活動とその役割に関する研究」グループの客員教授グループの東京大学教授藤森照信先生、京都大学助教授布野修司先生、そして広島大学教授杉本俊多先生、佐賀大学教授丹羽和彦先生からは貴重なご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

注：

1) 最初の広島通信診療所は大正11年に新築されたが設計者は不明であり、その後昭和10年に山田守の設計によって現在地に新築移転した。昭和17年には広島通信病院と改称し、現在旧広島通信病院と呼ばれているが、本稿では山田守の設計である広島通信診療所を考察対象とし、その竣工時の名称に依って広島通信診療所と称する。

2) 当時の合理主義というのは現実的な経済的合理性を言うのであって、理想的な機能を追及した高度機能形態に即した意味での機能的合理性を言うのではない。

3) 東京通言病院は日本の近代建築史上において、合理主義建築を代表する傑作であることは衆目の一致するところであろう。またそれは、その合理主義建築を主導してきた、いわゆる〈通言建築〉においても、同時期の大阪中央郵便局(昭和14)とともに戦前の棟尾を飾る大作であるばかりでなく、山田守の作品中においても東京中央電信局(大正14)と並んで屈指の建築でもある。合理主義そのものが批判の対象になることはあっても(丹下健三は、東京通言病院に代表される白タイトルの建築を「衛生装置」と評して嫌悪した。他の白タイトルの建物についてはいさしらず、東京通言病院については、形状からの理想もさることながら、その生理的格までを言い当てている。丹下健三は、「豆腐に穴をあけた」だけの無稽な合理主義だけでなく、白タイトルに染みでている山田守そのものともいえる生理性を嫌悪したに違いない。中真己、『現代建築家の思想・丹下健三序論』昭和43年)、合理主義建築の傑作としての東京通言病院の史的立場は不動であろう。また東京通言病院は〈通言建築〉のなかにおいて、郵便局、電話局あるいは通言局といった類の通常の局舎建築とは趣を異にする病院建築として、戦後の東京厚生年金病院を初めとして数多くの病院建築を手がけることになる契機となった作品であるとも言われている。村松貞次郎・堀勇良は「東京通言病院によって病院建築家としての山田守が生まれたのである。」(村松貞次郎・堀勇良「日本近代建築史における東京通言病院」/郵政大臣官房建築部『建築記録・東京通言病院』昭和53年所収)と述べ、山田守を「病院建築家」としても取り上げている。

4) 山田守設計の病院建築を竣工年代順に列記してみると広島通言診療所(昭和10年)、東京通言病院(昭和12年)、大阪通言病院(昭和13年)、東京厚生年金病院(昭和28年)、大阪厚生年金病院(昭和29年)、防衛庁東京中央病院(昭和30年)、大阪市立大学医学部附属病院(昭和31年)、熊本通言病院管轄(昭和33年)、社会保険横浜中央病院(昭和35年)、市立岸和田市民病院管轄(昭和36年)、大和郡山総合病院(昭和37年)、県立出雲中央病院管改築(昭和38年)、九州医科大学校舎及び病院(昭和42年)がある。このうち、東京厚生年金病院は文部大臣賞を、大阪厚生年金病院は建築学会賞を受けた名作であり、山田守を戦後における病院建築の第一人者としたものといってもよいであろう。長沢浄水場(昭和32年)、京都タワービル(昭和39年)、日本武道館(昭和39年)と話題作に事欠かないが、戦後における山田守の作品群の中で、病院建築の占める比重は大きい。確かに村松貞次郎・堀勇良が述べるように山田守を「病院建築家」として評価しても過言ではないと、筆者は考える。

5) 「東京通言病院と大阪通言病院の設計理念と形態は、ほぼ同じカテゴリーのものであって、両者の差は大小および敷地状況の制約によるのみである。」と山田守は「私の関与した総合病院のブロック・プランニングについて」(『建築文化』昭和30年7月号に所収。))において述べている。

6) 村松貞次郎・堀勇良は「昭和10年の広島通言診療所を習作と考えれば、…」として広島通言診療所を評価し(村松貞次郎・堀勇良、「日本近代建築史における東京通言病院」による。郵政大臣官房建築部、『建築記録・東京通言病院』昭和53年所収。)、薬師寺厚は「昭和10年完成した広島通言診療所は、山田さんの最初の病院建築であり、吉田さんの仙台通言診療所と共に日本では最初の合理的、機能的な病院建築であろう。」と述べている(薬師寺厚、「解説——作品とその変遷」による。山田守建築作品集刊行会、『山田守建築作品集』、東海大学出版会、昭和42年所収。)が実はその根拠の詳細が明らかになっているとは言い難い。

7) 広島通言診療所に関連しては、薬師寺厚、村松貞次郎らの著述や座談において言及されているのが見られる程度である。その他、『国際建築』第12巻1936年と山田守建築作品集刊行会、『山田守建築作品集』、東海大学出版会、昭和42年、P62-63に写真と幾つかの図面が載っている。そして、拙稿として李明、石丸紀興「戦前広島における通言省の建築家山田守の活動とその作品に関する考察」戦前戦後広島における建築家の活動とその役割に関する研究その2」日本建築学会大会学術講演梗概集、建築歴史・意匠 P523-5241998.9. がある。

8) 資料として、中国郵政局秘書課広報系から広島通言診療所に関連する資料や写真が提供され、原爆・被爆建造物を考える会(建築構造部分)からは「原爆・被爆建造物/広島通言病院調査報告書」、1990年4月。が提供された。第2筆者は原爆・被爆建造物を考える会の主幹であった。その

他合衆国戦略爆撃調査団、『広島に対する原子爆弾の効果』、第2巻、調査期間昭和20年10月14日～昭和20年11月26日、広島平和記念資料館所蔵。『高等建築学19・建築計画7通言省の建築』常磐書房、1933年P118所収。などの資料収集と調査(調査中、中国郵政局施設建築課の土江稔氏と畑本安幸氏から多くの情報を得た)、執筆などは第1筆者が行った。

9) 山田守建築作品集刊行会、『山田守建築作品集』、東海大学出版会、昭和42年。

10) 向井寛、『建築家 山田守』、東海大学出版会、1992。なお山田守の履歴については、山田健次郎、「山田守小伝」(日本電信電話公社建築局、『建築記録：東京中央電信局』、昭和44年所収)。浜口隆一、「建築家山田守の思想とその作品」(『国際建築』昭和29年2月号所収)。

11) 専門的な評価として、村松貞次郎・堀勇良、「日本近代建築史における東京通言病院」(郵政大臣官房建築部、『建築記録・東京通言病院』、昭和53年所収)。村松貞次郎、「東京通言病院に想う…」(『新建築』、昭和53年2月号所収)。星一郎、「通言病院所感」(『建築知識』、昭和13年1月号所収)。藤森照信、「通言病院」(『流動』、昭和52年9月号所収)などがある。また、山田守、「私の関与した総合病院のブロック・プランニングについて」(『建築文化』、昭和30年7月号所収)のような山田自身の分析もある。その他、通史の中で扱う近年の代表的なもので、稲垣栄三、『日本の近代建築—その成立過程—』、丸善、1959年(ここでは鹿児島出版会版、上、下2冊、昭和54年によっている)。藤森照信、『日本の近代建築(上)(下)』、岩波書店、1993。近江栄、堀勇良、『日本の建築(明治・大正・昭和)10、日本のモダニズム』、三省堂、昭和56年などがある。

12) 基本資料として中国郵政局秘書課広報系所蔵の広島通言診療所の沿革に関連資料。「通言病院の設立」(郵政省、『郵政百年史』、1983年9月16日、第2章、第7節の二、通言建築の展開)。

13) 山田守建築作品集刊行会、『山田守建築作品集』、東海大学出版会、昭和42年。

14) 病院建築院建築規則(昭和2年9月警視庁令第42号)第一条:「本令ニ於テ病院称スルノ医療ノ目的ヲ以テ患者10名以上ヲ収容スヘクモノヲ謂ヒ産院ト称スルノ妊婦10名以上ヲ収容スヘキモノヲ謂フ」になっている。高等建築学15・建築計画3・ホテル病院サナトリウム』常磐書房、1933年、第28編P4を参照。これによると病院と称しても構わないが、後の東京・大阪通言病院(表1を参照すること)などに比べると小さなものであると言ってもよいだろう。

15) 合衆国戦略爆撃調査団、『広島に対する原子爆弾の効果』、第2巻、調査期間昭和20年10月14日～昭和20年11月26日、広島平和記念資料館所蔵。

16) 「通言病院の設立」(郵政省、『郵政百年史』、1983年9月16日、第2章、第7節の二、通言建築の展開)による。

17) 明治から昭和初期にかけて諸官庁の中で、大学卒業(主に東京帝国大学)の建築家を擁して、全国に郵便局・電話局、その他放送・航空関係の諸設備を自主設計していたのが通言省経理局官繕課であった。通言省の官繕課の組織については、小原誠、丹羽和彦「分離派風局舎」と通言省官繕課の建築」日本建築学会計画系論文集第516号、P258。による詳しい研究がある。

18) 山田守の1930年代の合理主義建築活動を考える時、これまでは彼の昭和4年から昭和5年にかけての欧米への出張が目立ってきた。当時の欧州では機能主義・合理主義の建築が華々しく最初の花を開いた頃であった。グロピウス、コルビュジエ、ミース、アウト等の近代運動の指導者たちは住宅問題に一所懸命に取り組んでいた。パウハウスの建築は1926年、27年にはStuttgartのWeissenhof of Siedlung、29年にはコルビュジエのGarcheの住宅、など現代建築初期の代表的作品が出来ている。CIAMの第3回会議(1930年)が開催され、山田はそれにも出席している。こうした時代の欧米滞在によって山田は近代建築運動から強い影響を受けるところとなった。薬師寺厚は「30年代の青年建築家であった山田さんは欧米の現代建築をまのあたりに直接見て、非常に刺激を受けられたろうことは想像にかたくない。」(山田守建築作品集刊行会、『山田守建築作品集』、東海大学出版会、昭和42年。)と山田の欧米の出張について叙述した。もちろん機能主義・合理主義をそこで初めて知ったわけではないが、気質として多分に浪漫的なところをもち、分離派以来、表現主義的な傾向を深く身に付けていた山田にとっては、激しいショックといえるようなものだったようである。

19) 山田守の1930年代の設計活動に大きな影響を及ぼしたと考えられるものとして、通言省の建築設計方針の「設計申し合せ」(『高等建築学19・建築計画7通言省の建築』常磐書房、1933年P118

所収を参照。)の存在がある。このことは従来ほとんど言及されていないが、山田守の近代合理主義的発想と深く関わっていることを指摘したい。通言省は昭和7年10月24日通言省の建築設計方針に關連して「設計申し合せ」を決定した。これは電話交換局舎建築設計を基準として作成したものであり、局舎建築の機能性、材料の選定などについて規定し、建築の合理化・経済化に関する研究項目として「設計に関する事項」、「設備に関する事項」、「施工に関する事項」等についても委員会を設けて慎重審議することとしたのである。デザインについては厳格な申し合せというものはなく、各技師の心伝心で了解してやること、となっている。これらの合理化、経済化を求める設計方針は、山田を表現主義的傾向から合理主義建築活動へ傾斜させる直接的な影響を与えたと思われる。

20)山田守は、欧米への出張、通言省の合理化・経済化を求める建築設計方針を契機として、近代合理主義建築を目指して活発に建築活動を展開し、多くの実績を残すことになる。帰朝後、荻窪郵便局電話事務室(昭和7年)を始めとして、昭和8年の旭町郵便局電話事務室、昭和9年の宇都町郵便局電話事務室、昭和10年の熱海郵便局電話事務室、昭和9年の神戸中央電話局養成課などの局舎建築を設計する。荻窪郵便局電話事務室は、道路に沿ってゆるくカーブした建物の端の2階にある女子更衣室の窓が、カンチレバーで突出した大きなガラス面の設計になっているのは当時の日本としては斬新な手法であり、この建物の大きな特徴の1つである。この建築のもう1つの特徴は様々な形の窓が付けられていることである。この様々な窓があることについては、山田は「機能に依拠していた時代で、それぞれの室の用途に応じて窓を造ったのだ」(薬師寺厚、「解説—作品とその変遷」／『山田守建築作品集』東海大学出版会、昭和42年所収。)と述べている。また、旭町郵便局電話事務室、宇都町郵便局電話事務室、熱海郵便局電話事務室は、ほぼ同様な手法からなり、一連のシリーズをなしている。窓は荻窪電話局と様々な形ではなく、このシリーズを通じて次第に、少ない数に統一されて行く過程が伺われる。妻側は壁で立ち上げ、平側は天井兼用の出の短い薄い庇の上コンクリートの手摺りが付いていること、曲線は建物の角等に僅かに用いられているにすぎない等、後の通信病院のデザイン特徴に現れるものが少し見られる。なお、神戸中央電話局養成課は、柱間が狭く、窓高が高く、防火シャッターをつける等の条件に縛られる電話局の建物と違って、広い柱間一杯に大きな機長の開口を取った窓面積の大きな設計である。薬師寺厚はこれらについて「建物の内容の差から当然なことであるが、それはこの建物に、より軽快な感じを与えている。屋上の大きな2基の鉄塔と共に如何にも機能主義的な色彩がよく表現されている。」(薬師寺厚、「解説—作品とその変遷」／『山田守建築作品集』東海大学出版会、昭和42年所収。)と評している。これらの作品には山田がよく使用していた大きな曲面、アーチ模様の庇の工夫等、1920年代の表現主義色彩は既に姿を隠してしまっただけでなく、局舎建築として使いやすさ、経済性、規格化という通言省の局舎建築設計方針規定による影響が大きく、造形的には山田守の機軸によって窓を付けるなどの設計手法が認められるが、造形として明確な傾向を示すようになったとは言えない。

21)山田守、「私が関係した総合病院のブロック・プランニングについて」／『建築文化』昭和30年7月号に所収。

22)浜口隆一、「建築家山田守の思想とその作品」(『国策建築』昭和29年2月号所収)。

23)村松貞次郎・堀島良、「日本近代建築史における東京通信病院」による。郵政大臣官房建築部『建築記録・東京通信病院』、昭和53年所収。

24)薬師寺厚、「解説—作品とその変遷」／『山田守建築作品集』東海大学出版会、昭和42年所収。

25)きく人／薬師寺厚「対談、山田守に聞く」、『通信協会雑誌』、昭和35年10月号に掲載。

26)病院30周年記念、『東京通信病院三十年史』、昭和四十二年。

27)病院30周年記念、『東京通信病院三十年史』、昭和四十二年。

28)「座談会／東京通信病院の設計と施工について」(郵政大臣官房建築部『建築記録・東京通信病院』昭和53年所収)。その座談会の出席者は片山隆三(元通言省総務局管轄課附)、薬師寺厚(同左、元郵政大臣官房建築部長)川村田清次郎(元通言省総務局管轄課)守武充(同左)田口正一(同上)。聞き手は清水達明(郵政大臣官房建築部)市川直人(同上)、根橋利夫(同上)。

29)きく人／薬師寺厚「対談、山田守に聞く」、『通信協会雑誌』、昭和35年10月号に掲載。

30)「東京通信病院小史」(郵政大臣官房建築部、『建築記録・東京通信病院』、昭和53年所収)。

31)当時の規則として市街地建築物施工法令、第14条と病院病院規則昭和2年9月勅令第42第

10条第1号がある。内容については『高等建築学15・建築計画3・ホテル病院サナトリウム』常磐書房、1933年、第28編P37を参照。

32)当時の商店建築などは敷地周囲の道路により建築の外容を整えることが多かった。

33)結果的には南側の道路の向側の敷地を購入して病院の拡張が行われ、その空地は後のテニスコートになっていた。

34)このようなヒストリーコリドアを配するアメリカ式プランについては、高松政雄著「病院」第3章第2節「外来診療部の配置と所要の諸室」(『高等建築学15・建築計画3・ホテル病院サナトリウム』常磐書房、1933年、第28編P70)において紹介されているのみである。

35)例えば、日本赤十字社大阪支部病院(1929~34年)、京都帝国大学医学部附属病院(1931年)、満鉄大連病院本館(1925年)があるが、これらは日光浴室とディ・ルームを兼ねた部屋であった。

36)当時病院建築の計画について詳細を紹介している、高松政雄著「病院」(『高等建築学15・建築計画3・ホテル病院サナトリウム』常磐書房、1933年、第28編)においても特別病室の採光と日光浴との関係については述べているが単独の日光浴室の設置については言及されていない。

37)被爆建築物調査研究会編『ヒロシマの被爆建築物は語る、被爆50周年未来への記録』広島平和記念資料館発行、P120~121による。

38)現在の中国郵政局の旧庁舎。上浪明の設計であり、昭和8年完成。

39)昭和初頭以来の日本の近代建築の主要な傾向は、合目的性や経済性の追及ということで代表されてよいのであるが、1935年前後には、造形としてもかなり明確な傾向を示すようになっていた。稲垣栄三はその傾向を代表する建築として、幾つかの通言省や東京市の管轄部門が手掛けた建物のほか、山口政彦設計の日本歯科医専附属病院(昭和9年)や土浦亀城館による野村宮官アパート(昭和11年9)・強羅ホテル(昭和11年)、谷口吉郎の慶応義塾大学日吉寄宿舍(昭和11年)など、また請負会社設計部の設計によるものなかでも、ニュートーキョー(大倉土木・昭和12年)・東日会館(大倉土木・昭和13年)などが同じ系列に属するだろうと述べている。(稲垣栄三、『日本の近代建築—その成立過程—(下)』昭和54年6月25日発行。P345を参照。

40)幅のため東京・大阪通信病院の設計図面及び写真等を詳細に提示することができない。その詳細については、郵政大臣官房建築部、『建築記録・東京通信病院』昭和53年P8~100。山田守建築作品集刊行会、『山田守建築作品集』東海大学出版会、昭和42年P62~76、P94。電気通言省建築部『通信建築』昭和27年3月30日P65~78。日本病院建築協会他『日本病院建築図集』昭和35年3月1日P16~21。などを参照すること。

41)当時の商店建築などは敷地周囲の道路により建築の外容を整えることが多かった。

42)この空地には1962年に大阪通信病院新館が建てられた(山田守の設計)。

43)東京通信病院に引き続いて間もなく完成した大阪通信病院は外壁のタイルが純白でないことなどで、東京通信病院に比べるとやや重い感じを受ける。

44)山田守「私が関係した総合病院のブロック・プランニングについて」／『建築文化』昭和30年7月号に所収

45)村松貞次郎「東京通信病院に想う……」による。『新建築』、昭和53年2月号所収。

46)注28と同じ。

47)村松貞次郎・堀島良、「日本近代建築史における東京通信病院」による。郵政大臣官房建築部『建築記録・東京通信病院』、昭和53年所収。

48)村松貞次郎、「東京通信病院に想う……」(『新建築』、昭和53年2月号所収)。

【図の出典】:図1、2は、『国策建築』第12巻1936年所収(同様な図や写真は被爆建築物調査研究会編『ヒロシマの被爆建築物は語る、被爆50周年未来への記録』広島平和記念資料館発行、P120~121に掲載されている)。図3は中国郵政局建築部から提供された、修復図面と1947年の航空写真に基いて筆者が撮影した。図8、9は、中国郵政局建築部に保存されている。図10、11は山田守、「私が関係した総合病院のブロック・プランニングについて」／『建築文化』昭和30年7月号に所収(但し、加筆は筆者による)。図4、5、6、7、11、12、13は、山田守建築作品集刊行会、『山田守建築作品集』東海大学出版会、昭和42年所収。

(1999年12月8日原稿受理、2000年10月3日採用決定)